

## 人びとの悲しみを癒せるように。

秩父教会 田口晋央さん

田口さんは現在、秩父市内で介護・福祉の訪問系事業を営んでいる。「地域の人びとの悲しみを癒せるように」をモットーとしているが、この思いを抱く背景には過去に起きた悲しい出来事があった。以前、勤務先の特別養護老人ホームで、初老性うつ症状を抱えた入居者の方が一時帰宅時に自死してしまった。「しっかり寄り添っていれば…」と、後悔の念に苛まれた。そんなとき、ある人から、「どうしても食い止められない死もある。だから、その方の死をおして学んだことを生かしていくことが大事」と諭され、「尊い命を預かっている」という覚悟をもって、福祉の仕事に邁進した。令和2年末には、社団法人「せむいの和」を発足し、子ども・多世代食堂や成年後見事業などを展開している。「せむい＝施無畏」、つまり「何も畏れなくてよい」という仏の慈悲心のごとく、社会で悲しい思いをしている人の一助になりたいと、願いを込めている。



## 福田に種をまく——布施③

布施ふせ、とりわけ財施ざいせを考えるうえで、大切なことがあります。

一つには、困っている人やつらい思いをしている人のお役に立つことが、自分の救われであり、幸せだということ。また、その淨財じようざいが日々の生活のなかでこつこつと蓄えられたものであること。お金を貯めて布施をすることが人生の目的ともなり、生きがいにもなるというのはこのことです。布施をとおして自利じりと利他りたが一つになるそこに、人間としてもつとも大きな幸せがあるということです。けつして、たくさん布施をすれば大きな功德くどくが得られるというものではないのです。仏典にも「たとい乏とほしくとも、信仰心をもって与えるならば、他人を利するにより、その人は安楽となる」とはつきり示されています。安楽というのは、心が喜びでいっぱいになり、安らかな気持ちを得られる功德をいうのでしょうか。人さまの笑顔に心満たされて、なんのわだかまりもない清々すがすがしさを味わうと、それが生きる力となります。すると、その幸福感をまた味わいたくて、おのずから「布施をさせてください」という気持ちになるのではないのでしょうか。

# 立正佼成会